

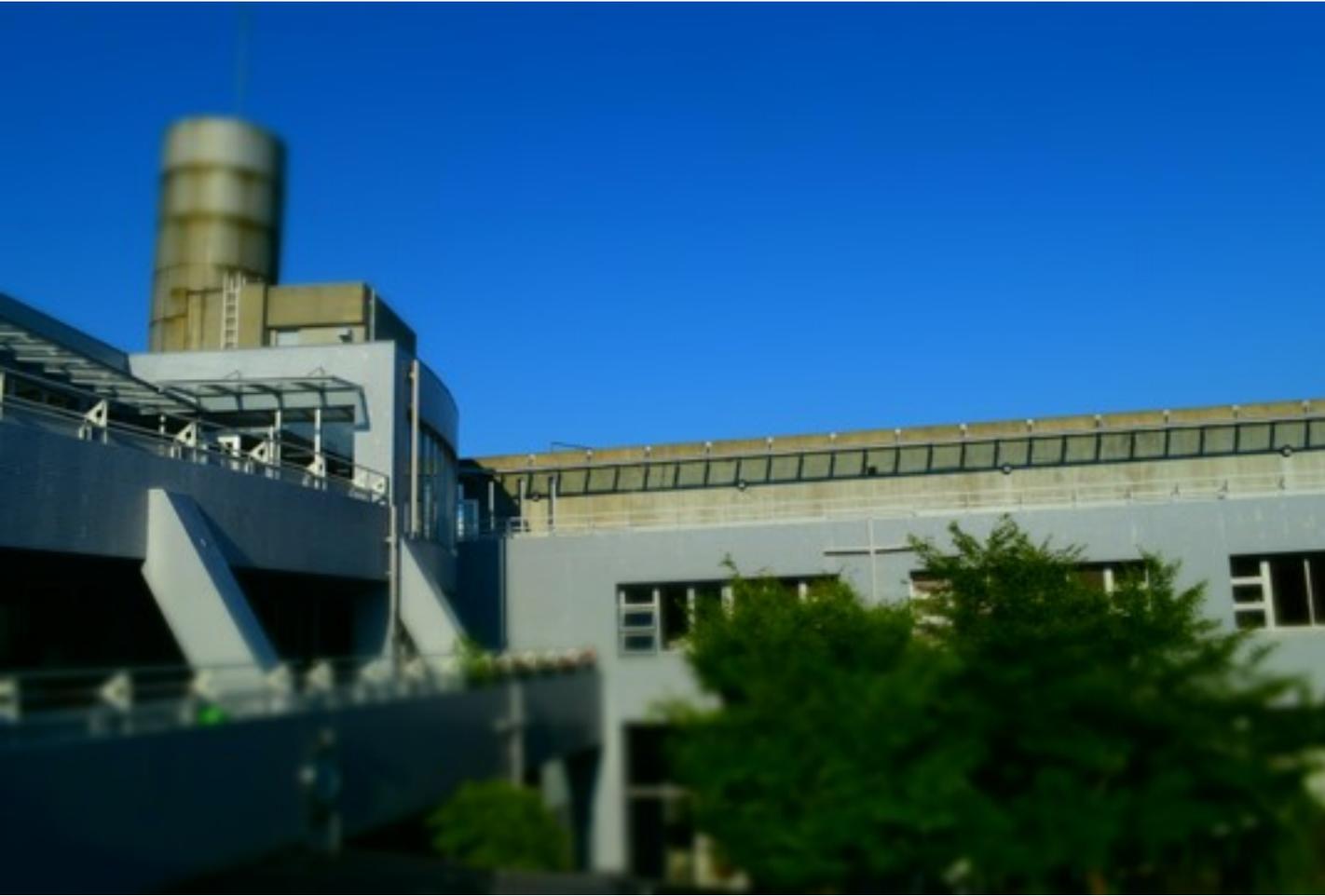
---

# INTERCULTURE

---

SUMMER 2019 No.150





# | Entrance Ceremony



SISは1991年に産声をあげました。最初は千里国際学園という名前で19年間。そして関西学院千里国際となり9年が過ぎ19+9の28年を経て今日から29年目を迎えています。

この間SISは皆さんの先輩の頑張りのおかげで大きく進化してきました。新しい変化もありました。でも28年間、変わらず大切に、貫いてきたこともたくさんあります。「OISと一緒にいること」「5つのリスペクトを日々の行動の指針にしていること」「探究することを中心に、自分から学びに飛び込むスタイルの学習があること」などすべて創立の時から変わらずあることです。また、この入学式のスタイルもそうです。今日皆さんは式の前に生徒宣誓に署名しましたね。この中に「世界

人権宣言の精神を追求します」とあります。このあと代表の7名の人にここで宣言をしてもらおうのですが、入学式の日、世界人権宣言の精神を守り、地球市民として生きる決意をもらうこと、これも1年目から今日の29回目まで変わらず行ってきたことです。

在校生のみなさんにとっても年に一度再決意をする日です。皆さん、と言いましたが、主語はYOUではなく、WEです。なぜなら私たち教員も、子どもの権利条約の精神を追求することを誓った教員宣誓に署名しているのです。今日は私たちみんなの決意の日です。



地球市民として生きる決意、とはどういうことでしょうか。私がリスペクトしている二人の人物の言葉を借りたいと思います。

半月前の3月15日に、ニュージーランドで痛ましい事件がありました。悲しく、腹立たしい事件でした。イスラムのモスクでの銃の乱射。3歳から77歳の50人も人の命が理不尽にも奪われました。

ニュージーランドのアーダーン首相は、素晴らしいリーダーですね。事件から72時間のうちに銃規制の決定を下すという行動力、そして何よりも、ムスリムの犠牲者遺族の方々に心から寄り添う行動をとっておられます。たくさんのメッセージを発しておられますが、その中で生徒・学生に向けてのスピーチもありました。Let New Zealand be a place where there is no tolerance for racism ever。人種差別を許さない国にするためには、学生のみなさんも一人一人が同じ気持ちを持ってください、と訴えるスピーチに心打たれました。おこがましいかもしれませんが、アーダーン首相の言葉をお借りして、私も皆さんにお願いします。

世界中で、そして、日本でも、この事件と根っこを同じくすることが起きていることに気づいてください、怒りの気持ちを強くもってほしい。そういう地球市民になるうとするためのトレーニングをSISで積んでほしい。

もう一人、言葉をお借りしたい人、それは野球のイチロー選手です。3月21日に引退を表明されました。

まずは、少々余談ですが、イチロー選手とSISには共通点があることに気づきました。プロ入りが1991年（SIS開校と同じ）、日本のプロ野球界で9年、アメリカ大リーグで19年の合計28年の選手生活でした。9年+19年（9+19=?）。SISと順序は違いますが同じ数字でしょ。軽く同じ28年と言いましたが、この28年という数字は野球選手にとって驚異の数字です。プロ野球人生の平均は9年ですから。イチロー選手も28年間、

住む国や環境が大きく変わっても、変わらず貫ぬかれたことがたくさんあります。朝カレーとかおにぎりという食べ物へのこだわり。自分に課した日々のストイックなトレーニング。引退会見では28年間貫いたこととして「野球のことを愛したこと」と言っておられましたが、このキャンパスも28年間代々のコミュニティメンバーによる変わらない愛が貫かれています。

違うのは、イチロー選手は引退しますが、SISは不滅です。29年目からもっともっと良い学校にしていきたいと思います。

さて、本題の、お借りしたいイチロー選手の言葉ですが、それは引退会見の一番最後の言葉。「アメリカに行ってよかった。アメリカに来て自分が外国人になったことで、人の心をおもんばかったり、人の痛みを想像したり、今までなかった自分があらわれたんですね。」と。

人の心をおもんばかったり、人の痛みを想像したり...これこそが地球市民です。

イチロー選手はさらにこう加えました。「本を読んだり、情報を得ることはできたとしても、体験しないと自分の中からは生まれません」と。

SISは、OISと共にある国際学校です。イチロー選手がアメリカで「体験した」というに近いことを体験できる場所です。でも、この場所に居れば自然と地球市民になれるわけではありません。決意がいるのです。そして自分から体験に飛び込んでいかなければいけません。

新入生、編入生の皆さん明日からの学校生活にはワクワクがたくさん待っています。新しい人やものとの出会いを楽しみ、飛び込んでいきましょう。29年目、SISをもっともっと良い学校にするために皆さん一人一人の力をください。共に頑張りましょう。

ようこそSISへ。入学おめでとう。

2019年4月1日 SIS校長 井藤眞由美



# | School Festival

2019.5.25





# | Concert







# Grade Trip

Class of 2020 went to Taiwan!



私たちclass of 2020は「台湾の人を知り、文化を知り、一生の思い出になるような旅行」というテーマを掲げ、4泊5日で台湾へ学年旅行に行ってきました。台湾に到着した日は、台湾を代表するパワースポットである龍山寺へ行き、日本とは違うおみくじの仕方など、初日から台湾の雰囲気を感じました。2日目は台湾の定番料理である小籠包を作り、台北からバスで1時間ほどの郊外にある烏来へ行きました。烏来では台湾原住民族であるタイヤル族の踊りを鑑賞したり、トロッコに乗ったり、秘境ならではの滝や緑溢れた山の景色を堪能しました。また、烏来街では自由時間を設け、屋台で現地の人と触れ合ったり、雑貨などの買い物をしたりするなどそれぞれの時間を楽しみました。3日目には、午前中に太極拳、パイナップル作り、足つぼマッサージの3つの中から体験したいものをそれぞれ1つ選びそれらを満喫し、午後には現地の大学で日本語を学んでいる大学生を筆頭にグループを作り、彼らに町を案内してもらいました。可愛いカフェへ行ったグループ、穴場のレストランへ行ったグループ、台北101で買い物をしたグループ、夜市へ行ったグループなど、みんなそれぞれでした。半日という短い時間でしたが、大学生との絆を深め、満足のいく町歩きが出来ました。



4日目には、千と千尋の神隠しの舞台となった九份と十份へ行きました。九份では雰囲気や景色を楽しみ、十份ではランタンに願い事を書き、空に飛ばしました。青空に向かってみんなで願い事を書いたランタンを飛ばした事はとても良い思い出になりました。4日目の夕方にはホテルでセミフォーマルの格好で報告会を開催し、それぞれの体験の紹介やグループごとの写真大会やクイズを楽しみ、台湾で撮ったたくさんの写真を見ながら、旅行を振り返りました。そして最終日には歴史的価値の高い總統府へ行き、台湾に別れを告げ、日本へ戻ってきました。掲げていたテーマのように、台湾の人文化を知り、間違いなく一生の思い出となる旅行になりました。また、この学年旅行で私たちは今まで以上に絆を深め、シニアとしての自覚を持つ事が出来ました。

学年旅行委員 委員長 岡崎 大々良



# | Home Coming Day

毎年3月の第4土曜日はSOIS大同窓会の日です。SOISを卒業した全ての卒業生が集う日として昨年からは開催しています。卒業して時間がたつと、同窓会の連絡するのも難しくなるのですが、毎年同じ日程同じ場所にすれば、ふと仲間に会いたくなったら気楽に来校することができます。

SISの卒業生だけでもすでに2000人を超えました。テレビで紹介された人工エラの亀井君だけでなく、千里の生徒らしく様々な世界で活躍をしているようです。仕事先で偶然に出会った千里国際の卒業生と、ただ卒業生だというだけで意気投合。世代が違っていて学校で出会ったことのない者どうしでも、なぜか同じ『におい』がするのだそうです。そんな彼らが繋がる場があればいろいろな可能性が広がるのではないかと、そんな期待を込めたイベントです。今年の大同窓会でも、製菓系の会社や研究所で仕事をしている卒業生が集まって話をしていました。何年か後に新しいビジネスが生まれているかもしれません。ある国のオリンピック代表チームのコーディネータをしている卒業生とTV局で番組制作をしている卒業生もつながったようです。来年の夏に放送されるかもしれません。千里国際の一番の自慢は『卒業生』です。

すべての卒業生への連絡です。2020年3月28日の土曜日午後1時、名刺を持ってカフェテリア前集合です。

田中 守



# 夏のキャンプ

2019.07

## Field Rangers 2019

村長 住友ひまり

フィールドレンジャーとは、7年生がSISに入って初めての夏休みにいく2泊3日の「里山家族」というキャンプを企画、運営する30人の組織です。フィールドレンジャーははっきり言って本当にハードです。ミーティングも多いし、自分たちが楽しむことより7年生を楽しませてあげることが優先しなければなりません。しかし、30人全員が本気になって頑張って作り上げたキャンプが終わった後には、私たち自身もこの上ない達成感を味わえます。このように高校生の組織でキャンプを1から作り上げる経験はなかなかできない体験だと思います。

この里山家族には毎年テーマがあり、今年は「翔」というテーマでキャンプを作り上げました。SISに新しく入ってきてくれた7年生たちがこれからのSIS生活で自分の翼を自由に広げて翔び立つためのキャンプにするために、私たちは、宝探し、肝試し、白玉作り、タイダイTシャツ作り、キャンプファイヤー、クイズ大会などのアクティビティーを企画、運営しました。

今年、私は「村長」という立場で初めから最後までこのキャンプを見守る中で「恩送り」の大切さを学びました。私を含めフィールドレンジャーのほとんどは7年生の時に里山家族キャンプに参加し、当時のレンジャーに憧れ、高校生レンジャーとしてまた里山家族キャンプに運営側として参加しています。だからこそ、レンジャーの里山にかける想いはとても強いです。このような熱い気持ちのレンジャーが「自分がしてもらったように新しい7年生にも一生の思い出になる里山キャンプを作っであげたい」と一生懸命頑張ることで毎年素晴らしいキャンプが作られ、新しい7年生にプレゼントされるのだと思います。今年、キャンプに参加した7年生たちの何人かが「自分も高校生になったらフィールドレンジャーになる！！」と私に言ってくれました。こうして、この子たちがレンジャーになった時の7年生にも、その次の7年生にも、その次の次の7年生にもきっと素晴らしいキャンプがプレゼントされ、この素晴らしいサイクルが続いていくのだなと改めて感じました。

受けた恩を直接その人に返すのではなく、別のの人に送る。そして、それを送られた人はさらに別の人に渡す。こうして世代を越えて、様々な人たちの恩が回る。この里山家族キャンプを通じて「恩送りのサイクルが自然と人を育てていく」ということを私は肌で感じることができました。私はこの体験をこれからも人生の糧としていきたいと思っています。



## 里山家族

7年生の感想

今村秋葡

里山での3日間、私は新たな目標を見つけました。それは、自分の意見をもっと積極的に言う事です。私はチームがまとまる事を今まで重視してきましたが、このキャンプで意見を言う事の大切さを学びました。私はキャンプ中、あまり意見を言っていないことに、ペアレンツの「もっと意見ちょうだい」という言葉で気づきました。自分の意見を言わないと、チームがうまく働かないことがその時わかりました。これから、この新しい目標に向かって頑張っていきたいです。

原田桜子

里山家族を通して私が感動したのはハイスクールのリーダーです。何ヶ月も準備をして7年生にとって最高の思い出を作ってくれました。「きっとSISではステキな先輩の背中を見習うことによって後輩が育つのだろうな」と思いました。私もリーダーのような、優しくて気が効く、厳しいことも言えるけれどユーモアがありフレンドリーな人に成長したいです。里山家族は楽しいだけでなく、このように色々なことを考えることのできる素晴らしいキャンプだと思います。

また、2日目の夜に、互いに将来の夢や目標を語り合う時間があったことでお互いのバックグラウンドや良いところを理解することができたと思います。ハイスクールのリーダー達のようになれるように秋学期からも頑張ります。



## 海洋&マリナーリーダー

海洋&マリナーリーダーキャンプは、今年も徳島県阿南市にあるYMCA阿南海洋センターで、39名のキャンパーと11名のリーダー、計50名の参加者と4名の引率教員（相良、牧、高橋、彦坂）で3日間の日程にて行われました。今年は天気にも恵まれましたが、それでもカヤックや、ジャンボカヌー、など日中の海のプログラムに加え、即興劇や各種レクリエーションなどの夜レクのプログラムまで、盛りだくさんで行われました。下記にキャンプ全体を取り仕切ってくれた総リーダー&副リーダーのコメントを載せましたのでどうぞご覧ください。

全体リーダー 岡本桜 副リーダー 岸上零奈・上村知

私たちは、2019年6月29日から7月1日の2泊3日で徳島県阿南市のYMCA阿南国際海洋センターへ海洋&マリナーリーダーキャンプとして訪れた。今年のマリナーリーダーは史上初の11名全員が12年生で、学園祭終了後からミーティングを重ね、強い結束力と長年の絆でわいわいしながらも順調に進めることができた。今年は、キャンパーみんなを楽しませる目標を叶えるべく、グループ分けと部屋割りにこだわり、どのグループもバランスよく学年を超えてキャンプを楽しむことができた。「リーダーが楽しそうじゃなければキャンパーも楽しめない！」と思い、全体ミーティングでは1人1人キャッチフレーズをつけて自己紹介し、笑いに包まれたスタートになった。

キャンプでは3日間あいにくの雨続きでスケジュールが大幅に変更することもあったが、リーダーを中心にみんなの協力があったため、どのプログラムもスムーズに楽しく行うことができた。ミーティングで主に時間を費やした2日間に渡るレクリエーションでは少しグダグダになった部分もあったが、リーダーも一緒になって楽しむことができ、劇の発表ではどの班もユニークだったため接戦となった。



その中で全体リーダー・副リーダーとして学んだことは話を聞いてもらう大変さだった。キャンプ初日は、前で話をしている人もケタイを触っている人がいたり喋っている人がいたりして、まとまりがないように感じた。それから、先生に指導してもらいながらどうしたら注目してもらえるのか、どうしたら盛り上げることができるのかを考えながら話をするようになって、リーダーシップが学べた3日間だった。また、キャンプ全体としては集団行動の中で時間を守る大切さを知れた。みんなが時間を意識して行動してくれたため朝の集いや食事時には遅刻する人は少なく、むしろ少し早めに行動してくれて自由時間等にゆとりを持つことができた。さらに海のプログラムの際にはYMCAの吉川さんが問いかけ教えてくださり、友達と協力することと海の危険さを学んだ。

私たちはこの海洋キャンプの3日間を通して、リーダーとしての大変さや楽しさを知ることができた。最終日にはキャンパーから「楽しかった!」「また来年も参加したい!」という声を聞き、キャンパーみんなを楽しませるという目標を達成することができたのではないかと実感できた。このキャンプを通して学んだことを、残りの高校生活や大学生活でもどんどん活かしていこうと思った。

最後になりますが、引率して下さった先生方、指導して下さったYMCAの方々、本当にありがとうございました。



## フォレストマイスター・森の達人キャンプ

7月1日～4日の4日間、関西学院千刈キャンプ場にて、「フォレストマイスター（高校生）」・「森の達人（中学生）」が行われました。期間中に行われる全てのプログラムを高校生リーダー29名が企画し、中学生キャンパー36名とともに自然を満喫しました。以下、12年生のリーダーとして活躍してくれた2人の感想です。

12-3 杉原亜津

森の達人キャンプは中学生のキャンパーが森の中でアクティビティなどを行い、自然を楽しむキャンプです。リーダーは様々なアクティビティやプログラムを準備して、キャンパーのサポートをします。私はこの森の達人のキャンプにおいてMD（マネージメントディレクター）という総監督的な役職を務めていました。主な仕事内容としては、キャンプ本番のスケジュール管理や全体への情報伝達、全ミーティングの進行です。準備段階で行った下見では情報伝達があまりできず、予想外のスケジュール変更にも対応できませんでした。しかし、先生や先輩方のアドバイスを受け、本番では上手く情報を伝達させることができ、スケジュールに関しても天候や予想外の遅れにも対応することができ、予定していたプログラムを全て行うことができました。私の仕事はスケジュールを管理することはもちろんですが、リーダー全員をまとめることも重要な仕事です。初めは各々のリーダーに温度差があったりしていましたが、最終的には全員がこのキャンプを最高のものにしようという思いでプログラムに取り組んでいました。キャンプの最後にはキャンパーだけでなくリーダーも「楽しかった」「また来年も来たい」「高校生になったらリーダーをやりたい」という声を多数聞くことができ、とても嬉しかったです。また、私自身もこの役職を務めて一層責任感を持てるようになり、リーダーシップを身につけることができました。もし森の達人に興味を持った方がいらっしゃいましたら、来年キャンパーでもリーダーとしても参加していただけると幸いです。



12-4 鈴木千花

私は、フォレストマイスターキャンプのプログラムディレクター（PD）を務めさせていただいた、12年生の鈴木千花です！フォレストマイスターにおけるPDという役職は、本キャンプのまとめ的存在です。運営メンバーである高校生のリーダーをまとめてくれるMDに対し、PDは、森の達人キャンプがキャンパーである中学生が楽しめるものになっているかなど、キャンプ全体のプログラムを見ます。

私は、ミドルスクールの頃からキャンパーとして森の達人キャンプに参加し、それ以降もハイスクールではリーダーとしてフォレストマイスターに参加し続けるなど、このキャンプに関わり続けました。今年度のキャンプは、そんな私が中学生の時から憧れていたPDという役職で臨んだフォレストマイスターでした。

初めてリーダーとして参加した10年生の時は、自分のタスクをこなすのに精一杯だったのに、今度はキャンプ全体のプログラムを見なければいけない立場になりました。立候補したものの、始めはそのプレッシャーに何度もくじけそうになりました。今年度は特に、フォレストマイスター初参加者のリーダーも多く、いいプログラムにしていけるか、正直不安でした。

しかし、キャンプ中にキャンパーが楽しむ姿はもちろん、そのキャンパーを頼もしく支えるリーダーの姿を見て、更には「このキャンプに来てよかった！」というキャンパーの声も聞こえて、私たちフォレストマイスター2019の参加者が突っ走ってきた2か月間は、このためにあったのだと感動しました。そして、今でもこのキャンプを通して仲良くなれた後輩たちが学校で話しかけてきてくれるのもとても嬉しいです。

キャンプを0から作る。苦勞も多かったのですが、それを越える充実感や学びがあります。みなさんも是非、フォレストマイスターに参加してみてください！これからの森達、楽しみにしています！



## 食農体験キャンプ

ディレクター 山田 優介

今年で12回目となるこのキャンプは、昨年度から高校生リーダー4人を加え、中学生高校生を含んで総勢26人で行っているキャンプです。タイトルの通り、農業や家畜の世話の体験をし、そこから得られる食べ物に感謝し、自然を感じながらのびのびと過ごすような内容となっています。

高校生リーダーは2日間ある夜の企画を作っていますが、毎年創意工夫を凝らした企画に、中学生だけに限らず引率している我々も楽しませてもらっています。

下記、高校生リーダーの感想文を紹介します

1日目の乳搾りは初めての経験で、体験の中では一番印象に残っている人が多かった印象です。その牛乳を使用して自分達で作ったアイスは非常に濃厚で絶品でした。その後に行ったトマトハウスでは、紫やピンクのトマトを収穫しました。緑のトマトは熟しているのを見極めるのが難しかったけれど、完熟しているものは黄色がかったので、黄色っぽいトマトは完熟しているものと判断しました。その日の夕食はとんかつ定食。超肉厚、ジューシー、新鮮、で最高でした。

2日目の朝は、自分たちで収穫したしいたけをその場で炭火焼きにし、試食しました。焦げ目があってとっても美味しく、

朝から大満足しました。

昼間は農学舎に行って、薪割りをしたりカレー作りをしたりしました。晴れの日には農作業をしますが、雨だったのでそれは残念ながら出来なくて、にんにくの皮を剥き、干



すといった農作業の体験をしました。夜のリーダー企画は食農格付けチェックを企画しました。テレビの芸能人格付けチェックとルールはほとんど同じでしたが、チーム形式での対戦とし、もくもくの食品と市販の食品の食べ比べ等を行いました。もくもくの牛乳のアイスvs普通牛乳のアイスなどです。最後まで1流に残ったチームは、9チーム中3チーム。志垣先生と山田先生も参加しましたが、志垣先生は1流をキープしました。さすが生活科学科の先生です。

3日目の朝食は最後のバイキングです。1日目にあったジャージー牛の搾りたて牛乳や、トマトハウスで収穫体験したトマトがカラフルに並んでいたり、3日目に作るパンやソーセージがありました。並んでいる食べ物がどこから来ているのかが分かるので食べ物に心から感謝出来るし、新鮮で素材の味を楽しめました。帰る直前の自由散策では、みんな思



い残すことがないように行きたいところに行き、食べておきたいものを食べ、お土産をたくさん買いました。あっという間の3日間でした。

このキャンプは、食べるのが好きな人、牛や馬に触れ合いたい人、畑仕事に興味がある人、のびのびとした環境で過ごしたいキャンプに行きたい人におすすめです。大人気で抽選になる可能性大ですけど、是非応募してみてください。

次年度もこのキャンプは絶対にあるはず！ 食に関する収穫体験、農作業体験などに興味がある中学生及び高校生で食事や農業に関連した夜の企画を考えてみたい人、是非参加してみてください！



## 千里ヒストリア

今年のテーマは、「東京今昔物語」で、舞台は大河ドラマ「いだてん」でおなじみの東京です。

1日目は、新幹線に乗って東京駅へ向かい、衆議院や皇居を見学しました。その後、グループごとに別れて個人の学習を深めました。神保町の本屋街散策、浅草でのトンボ玉作り、東京駅でのおみやげ吟味など各々時間を有効的に使うことができました。本屋街では、たくさんの種類の本屋さんがありました。トンボ玉作りの体験は、一つ一つの手順を丁寧に教えてもらい、貴重な経験でした。

2日目は、上野動物園へ行き、各班見学したい動物を見学しました。解散する前にパンダの「シャンシャン」を見学したのですが、2020年に中国へ帰るそうなので、もう二度と会えないと思ったのか、みんな写真をたくさん撮っていました。その後、2つの班が飴細工でウサギを作ることに挑戦しました。初心者にはあまりにも難しく、少しいびつなウサギがたくさん並びましたが、滅多にできない体験だったので楽しかったです。他にも、江戸東京博物館へ行き、過去から現在への東京の移り変わりを見て多くのことを感じることができました。

3日目は、東京タワーへ行き、その後増上寺に向かいました。空模様が芳しくない3日間でしたが、つかの間の晴れの間、東京タワーに登ることができたので運が良かったと思いました。増上寺ではたくさんのお地蔵さんが並んでおり、皆赤い帽

子をかぶっていました。本殿は背景に東京タワーがあり現代の建物と昔の建築物との比較が一目でわかり感慨深かったです。その後は解散し各グループで別行動となりました。竹下通り、明治神宮、渋谷、など各グループごとにヒストリア最終日の思い出作りをすることができたのではないのでしょうか。みんな集合時間ぎりぎりまで東京を楽しんでいました。



## 42.195km ウォーク in 琵琶湖

1日目：京都の蹴上駅から疎水沿いを歩きながら、大津の琵琶湖が見えるホテルまで歩いた。夜のレクリエーションはグループ対抗でミニゲームをした。

2日目：ホテルから琵琶湖に沿って何本も橋を渡り、草津の道の駅でお昼ごはんを食べた。長い橋を渡って、たどり着いたコテージの目の前の琵琶湖で湖水浴を楽しんだ。そのあとのお風呂が身体を癒してくれた。夜は琵琶湖の夜景を見ながら、BBQと花火を楽しんだ。

3日目：コテージから志賀駅まで歩き、バスに乗って琵琶湖バレイまで行き、琵琶湖を一望できる場所までロープウェイで上がった。絶景を期待したが、濃霧のため真っ白だった。それもまた別世界にいるような感覚だった。ランチのビュッフェでは和洋中に加えて、ほうじ茶フィナンシェが絶品だった。☆この3日間で仲間とともに、42.195km歩き切ることができた！

みんなの振り返りシートより

### MS

- ・ともにあるいたり、寝たりすることにより、距離が縮まって、先輩後輩関係なく話すことができた。
- ・メンバーと声を掛け合ったりすることで精神的に楽に歩くことができたので、チームワークの大切さがわかった。
- ・思っていたよりも疲れたしもう歩きたくないとも思ったが、ゴールした時の達成感はそれ以上で最後まで歩くことができた良かった。
- ・このキャンプは単に歩くだけではなく、肉体的にも精神的にも鍛えられた
- ・琵琶湖でバレーボールやドッジボールをしたのがいい思い出になった
- ・コミュニケーション能力伸びたし、班の子たちだけでなく、他の子たちと輪を広げることができた人との繋がりの大切さに気づき、そして人間としても成長できた。

・私はこの三日間で根気強く歩くことができたと思うし、自分たちだけで、時間を見たりして行動することができるようになったと思います

・キャンプ自体を楽しくしようと努力してくれて本当にありがたいと思った。

・このキャンプでたくさん笑うことができたのもリーダーのおかげ。ありがとう！



### リーダー

・今まで、人をまとめるようなことをしたことは一度もなかったのので、言うことを聞かなかつたらどうしよう、仲よくなれずにグループに気まずい空気がながれたらどうしようなどの不安がたくさんあった。でも、実際にミドルの子たちはとても話しやすかった。話題をひたすら振り続けて会話をやめない努力もした。だから、自分が今まで参加したキャンプでハイスクールのリーダーたちにしてもらっていたことを今回してあげられたと思う。今回のキャンプで、グループの全体をみて気を配ることに成長したと思う。

・リーダーとして、同じメンバーの子に対して気を使ってあげること、例えば歩くときはどのくらいのスピードで歩けばいいのかを考えることで責任感やグループ内での協調性がより深まった

・みんなで話し合いながら歩くということがすごく体力的にも精神的にも支えになり、弱音を吐かずに最後までやり抜けた

・長距離を人と一緒に歩くことで、仲間意識が強くなった

・チームメンバーの調子を確認しあうことで結束力が高まっていった

・私の班は、静かでおとなしい子が多く、どうやって団結力をうみだせばいいか、盛り上がればいいのかかわわからなかったけど、その不安は一日目やレクを通してだんだん無くなったように感じた。

・msメンバーが積極的に手伝ってくれて、私たちを助けてくれたことに感謝



## 農家ホームステイ

SIS 9-1 福田 綾

私は今年の夏のキャンプで農家ホームステイに参加しました。私のホームステイ先のご家庭はベジタリアンということで、野菜を中心にしたご飯を食べました。3泊4日、お肉を食べないという生活は初めてだったので「食」に関しての体験でベジタリアン生活というのが今回のキャンプで1番印象が強いです。活動として、草木染めと障子張りをしました。草木染めは、街の中に咲いている何種類かの花を集め、その花を水に浸して、温め、花から色素を抜き、花の色素で赤や黄色になった水に布を付け、布に色を入れるという活動でした。人生で初めての草木染めだったので上手くできるか不安でしたが思っていたより簡単に出来ました！予想以上に花をたくさん集めないで色が濃く染まらないことがわかり、次回草木染めをする機会があれば今回の活動を活かし、たくさん花を集めようと思いました。またよけ花を洗うことも大事だということも勉強になりました。次に障子張りです。これもまた人生初の体験でした。まずそもそも家に障子がないので見る機会すらあまりありませんでした。始めに障子の紙を全て剥がすのですが、初めてということもあり紙を全て剥がすのに対して勿体ないと思いました。その後、のりで少しずつ新しい紙を付けていき完成した時にはすごい達成感がありました。中腰での作業だったので体力も削られ大変でしたが、また来年、同じ農家さんの家に泊まる人達へとこの作業が受け継がれていくと思うとなんだか新鮮な気持ちになりました。これからの人生のどこかでこの体験が役に立つかもしれないので体験できて本当に良かったなと思います。3日目の夜ご飯はそれぞれのホームステイ先でバラバラになっていたメンバーみんなで集まり、バーベキューをしました。3日ぶりのお肉ということでいつも食べているお肉よりすごく美味しく感じました。バーベキューが終わりに近づくと次はみんなで花火をしました。花火が終わると、辺りはすっかり暗くなりみんな、バラバラに各家に帰った後、私たちのグループは蛍を見に行きました。過疎化が進む静かには街の夜は川と音と虫の音がよく聞こえました。綺麗な川のほとりに蛍が数匹いました。このキャンプ中ほとんどが雨で蛍を見るのは難しいかなと思っていましたが見る事が出来て良かったです。最終日、最後にホームステイ先のご家族の方と一緒に昼ご飯を食べ、お礼の言葉を言い、キャンプが終了しました。今回のキャンプは将来どこかで役に立つような経験がたくさんできたキャンプだなと思います。一つ一つが貴重な体験でした。キャンプに行っていなければ出来なかったことがたくさんあります。3泊4日、短い間でしたが充実した4日間になりました。

SIS 9-1 大川 澄蓮

私は夏のキャンプで普段体験できない様々なアクティビティをしました。

私が訪問した家庭はColorsネギさんという家庭で、普段から私達だけではなく海外からきた人も受け入れている家庭で海外の人からは人気らしいです。また、ベジタリアンのご家庭でし

た。私はベジタリアンのご家庭に訪問するのは初めてで1番印象に残っている料理は大豆で作った唐揚げです。料理も私達が全て作り、私は普段料理をしないので勉強にもなったし友達とコミュニケーションもとれて楽しかったです。和歌山は梅の名産地でもあり、梅を使った料理も多くて梅が好きな人にはオススメのキャンプです！1日目はこれからのスケジュールをたてました。

2日目は草木染めと障子貼りをしました。草木染めは植物を使って布などを染める作業で私も初めて知りました。1回染める時に沢山の布を入れるけどどれも完成した時は模様のつき方が違ったり色の濃さが違うので一つ一つの作品が違うので、世界に1つしかないオリジナルなものが作れます。私も今回靴下とハンカチを染めました。

障子貼りは簡単にみえてとても難しかったです。

1回失敗してしまうと綺麗に貼れることが出来ないで1回勝負で緊張します。また、先生も途中からきて一緒に障子貼りをして楽しかったです。夜は、蛍を見に行っただけど残念ながら1匹いるかいないかで沢山の蛍は見れませんでした。

3日目は日本一のヤッホーポイントに行きました。ほんとにヤッホーと言うとかえってきて私はやまびこが初めてだったので面白かったです。また、やまびこを使って皆んなでゲームをして遊びました。3日目の夕食は農家ホームステイの皆んなが集まってバーベキューをしました。久しぶりのお肉でとても美味しく感じました！また、花火もして普段は余りかかわりが少ない8年生とも話す事ができて思い出になりました。

4日目の最終日は、最後にご飯を食べて御礼の言葉を言って終わりました。

今回のキャンプでは普段体験出来ない事を体験できて1番印象に残ったのが障子貼りです。私達のような現代っ子には体験できないことだと思うし今後も体験出来ないと思うのでとても貴重だと思いました。他にも色々なアクティビティーをしていい体験ができました。



## チャレンジキャンプ Challenge Camp

2019年度のチャレンジキャンプは11年2人、8年2人という異例の少人数でチャレンジした山登りキャンプだった。

長野県にある小谷村、そこに私たちがお世話になったOBS（アウトワード・バウンド・スクール）の校舎がある。そこは、周りにはカモシカがいたり、校舎の使われていないブ

ールには鴨の子供が泳いでいたり、夜になると蛙が鳴いていたり、沢山の自然があり素敵な所だった。

そこで一夜を明かし2日目の朝、私たち4人は初のロッククライミングにわくわくしていた。約10mと約15mの高さの崖を自分の体のみを使ってよじ登る。前日の雨で岩は濡れていて、岩をつかもうとしても手からつるっと滑り、命綱一本で宙ぶらりん状態になったこともあった。岩を見たときに「できそう！」と簡単に思った自分を恥じるくらい想像以上に苦戦させられ、挑戦の制限時間20分という時間の中で奮闘した。悔しさが残った人も残らなかった人も「チャレンジしきった」という達成感を得ることができた。

3日目の朝、初めて背負う大きな荷物をもって登山口へと車で出発した。その大きな荷物の中にはテント、寝袋、調理器具、自分の衣服に寝袋など合計約20kgの入っていてザックは80リットルの巨大なものだ。

これから明後日までお風呂、携帯もお預けで、初めての登山。重い荷物と共に期待と不安でいっぱいのまま、拠点となるキャンプ地がある標高約2704mの燕山荘へと長い道のりを歩き始めた。

歩いている中でリーダーはペース配分が分からず苦戦し、慣れない約20kgの荷物のせいで肩や腰、膝を痛めた生徒もいたが、最後は4人で協力し荷物を分担して目標時間までに到達することができた。そこには10年に一度拝めるか拝めないかと言われる絶景が広がっていて、見た瞬間疲れが吹っ飛ばすほど見事な景色だった。360度首を見回してもどれも山、夕焼け頃には赤やピンクに染まる山を見ることもできた。また天然記念物のライチョウとも遭遇したことは、かなりテンションが上がった出来事であった。一見終わったかのように思った私たちのチャレンジにはまだまだ続き、その後はテントをたて夜ご飯をつくりその日を終えた。

4日目はなんと朝4時起きで6時出発。山ならではのこの早い時間帯に、私たちは第2のチャレンジである標高2921mの大天井岳目指してまた歩いていた。大天井岳頂上に予定より1時間早く到着し、歩いた時間は約4時間。4人の足並みも揃ってきて、途中休憩をはさみながらも目指したその頂上にはまたまた絶景が広がっていた。思わずみんな「ちょー綺麗やん」と、声に出したほどだ。山々が連なっているのを見ながら食べた菓子パンやお菓子はさらに美味しく感じ、達成感に浸った。

「この風景を見たけりゃ来るしかない。チャレンジするしかない」と思う。

その日は時間に余裕があったおかげで燕岳にも向ったが、急な天候の変化により燕岳からの景色は望めず、見えるのは濃い霧の中にうっすらと見える山のみだった。ここで私たちが感じたことは、山は本当に天候が変わりやすく、私たちにはただ「天候が回復するのを祈りながら、待つこと」しかできないということだった。同日のテント泊最後の夜は雨がざあざあに降り、風も強く自然の怖さを始めて感じた夜だった。

最終日の朝、雨がまだ降り続けている状態の中、私たちは約2日間寒さと雨を凌いでくれたテントを片付けてキャンプ地を

後にした。慣れ親しんだ、行動前に必ず行う山の上での準備運動もこれで最後だと思うと少し寂しく悲しかったのを覚えている。雨のおかげで更に重たくなったであろう荷物を持って、霧で約30m先も見えない天候の下歩き始めた私たち4人の心の中には「早く帰って休みたいけれど、名残惜しい」という感情が複雑に絡み合っていた。そんな美しいことを思っていたが、1人を除く3人は歩き始めた途端「温泉」しか頭になかったという。

山歩き3日目ということもあり、リーダーのリーダーシップは目を見張るほど良いものになり、ほかの3人も山に適応したのかそのおかげで予定より2時間も早く温泉に浸かることができた。

最終日は5日間のことを振り返って、4人で自分たちの感じたことや思ったことについて情報交換をした。

このキャンプでは「協力」することが必要不可欠で、たった1人でも欠けると達成できないハードなチャレンジばかりだった。

新たな自分を発見、変わりたい人、何よりあの見事な風景を見てみたいと思った人には参加を強く勧める。



From 30th of June to 5th of July we went to Nagano to climb the mountain. The mainpart of this camp is climbing a mountain. Also in this camp we did rock climbing and makefoods with our teammates. We climbed Mt.Tsubakurodake and Mt.Otenshodake. The height of Mt.Tsubakurodake is 2921m and Mt.Otenshodake is 2704m. We saw a good view from the top of a mountain.

In this camp we learned to cooperate with our teammates to challenge climbing a mountain. We cooperate to cook meals and we also set up a tent with our teammates.

If you want to try your best or if you want to see a great view we will recommend you this camp.

## 村のこしプログラム

「大綱集落での6日間」

12年2組12番 永富碧唯

### 1. はじめに

私は、2019年6月30日から7月5日までの六日間を長野県北安曇郡小谷村にある大綱という集落で過ごしました。人口は67人。朝6時、昼12時、夜18時に町内放送と音楽が流れ、商店

や自動販売機はなく、自然豊かなところですよ。私たちは地元の方々から、伝統文化、昔の暮らしと現代の生活、農業・林業の問題、Uターン・Iターン者の村おこし事業など、多様なことを教わりました。このうち印象に残ったことを3つご紹介いたします。

### 2. 伝統文化を継承する難しさ

#### (1) 伝統食「枳餅」

枳餅は枳ノ木の実を混ぜた餅で、大綱の特産品です。集落の子どもは、小さい頃から絶対に枳の木を切ってはならないと教わります。食料難の時に、集落の人々を栄養失調から守った木で、精神的な象徴になっているからです。集落のはずれに、毎年秋に、皆で実を拾うとても大きな枳の木があります。昔と変わらぬ姿で集落を見守る枳の木ですが、この木は一度、忘れられた過去があります。現代化が進む中、人々はしだいにこの餅を口にしなくなりました。しかし、村人を支えてくれた枳の木を忘れてはならないと、一人の女性が立ち上がりました。私は、この伝統食を自力で復活させた諸角妙子さんにお話を伺いました。

枳餅の作り方は親から子へと口頭で受け継がれるため、作り方を記した文献がなく、復活させるのにかなりの苦労を要したそうです。枳の実は、見た目はどんぐりのような実で、そのまま生で食べることができません。特殊な方法で灰汁抜きを繰り返して、ようやく食べることができます。諸角さんは皆の記憶を頼りに、集落の女性4人で枳餅作りに取り掛かり、試行錯誤の末、ようやく灰汁が抜けた枳の実を作れるようになったそうです。もともとは伝統食の復活が目的でしたが、この枳餅のことを知った他の集落の人々がこの懐かしい餅を求めるようになり、一般に販売、また郵便局では故郷品として扱われるようになり、全盛期は、1シーズンで3000枚の枳餅を作ったこともあるそうです。

こうして30年ほど枳餅を作り続けたそうですが、高齢になり、とうとう2年間、枳餅作りを諦めていたところ、ちょうど都会から大綱集落に移住してきたIターン者の方々が枳餅作りを繋いでくださることになり、枳餅を作り続けることができるようになったそうです。また役場主催の講習会を通じて、他の地域の方々に枳餅を伝える機会もでき、枳餅を作る技術は絶えることなく引き継がれています。移住者の方々は、自分の子ども達にも枳餅を引き継がせたいとおっしゃっておられました。

#### 【枳餅の作り方】

枳餅は、食べられるようになるまで数カ月を要します。ここではポイントを絞って記します。

- 1) 枳の実を拾いに行く。大きい実の方が、身が多く、餅にするのに良いそうです。
- 2) 3日間、水につける。
- 3) 1か月間、天日干しにする。
- 4) ナイフを使って殻を剥く。
- 5) 1晩、冷水に浸す。
- 6) お湯をかけて、灰汁を抜く。
- 7) うす皮を手作業で剥いていく。



## 8) 餅米に混ぜ、餅をつく。

引き継いだ移住者の方は、枥餅作りは奥深く、技術だけでなくその精神も教えてもらえたとおっしゃっておられました。一度、生産数の増加を考えて、餅つき機を導入する話も上がったのですが、手ごねでしか出せない香りや味わいを残すため、昔ながらのままで作ることに決めたそうです。諸角さんは、十人十色の味と香りが生まれるのが枥餅の特徴で、同じものは一つもできないとおっしゃっておられました。上手に作れたものは風味がよく、一切の苦みがなく美味しいそうです。一方、あまり上手に作れなかったものは、灰汁が強く、苦い味になるそうです。プログラム最終日、私たちにこの体験をさせてあげようと、現地コーディネーターが、木臼と杵を使った昔ながらの枥餅作りを体験させていただきました。初めて実際に口にした枥餅は、初めて食べたのにも関わらずどこか懐かしさを感じる味で、なくなってほしくないと感じました。



## (2) 伝統工芸「猫つぐら」

小谷村の大切な伝統工芸に藁細工があります。小谷は秘境の地だったため、他の地域と比べ、化学繊維やゴム、プラスチック製品が入ってきた時期が遅く、80歳以上の方であれば今でも藁を使って物を作ることが出来るそうです。しかしながら、この伝統工芸も、若者の村離れや現代化の流れの中、継承する人が途絶え、「猫つぐら」(猫の寝床。藁で作られているため通気性が良く、適切な暗さと狭さがある。)に関しては、小谷村で作れる方が最後の一人になってしまいました。そこで総務省地域おこし隊が、この猫つぐらを継承させる事業に乗り出しました。私はその担当者からこの事業についてお話を伺いました。

まず最後に残った名人を頼りに、村役場を通じて職人志望者を募集し、職人養成スクールを始め、この二年間で5名の方が職人として認められるようになり、一定のクオリティーの商品が量産できるようになりました。また伝統工芸品として価格設定を見直し、道の駅で商品の販売もしてもらえることになりました。試しに一度、善行寺の特産展に作品を出展してみたのですが、作品は一つも売れなかったそうです。ところが銀座の特産展に出展したところ、かなりの反響があり、一転、6人の職人さんだけでは制作が間に合わず、現在、予約待ちの状況だそうです。また新しい職人さんができたことで、新しい感覚の猫つぐらもデザインされるようになりました。都会の家にも合うように、違う色の藁を織り込んで柄を出したり、猫が出てくる窓を増やしたり、高低差をつけたりして、これまでにないユニークなデザインが生み出されています。

しかし、この工芸を後世に残すには、まだ職人さんの数が足りません。制作に時間がかかるにも関わらず収入が合わないため若者が職人として選択しにくいこと、耕作機を使って稲刈り



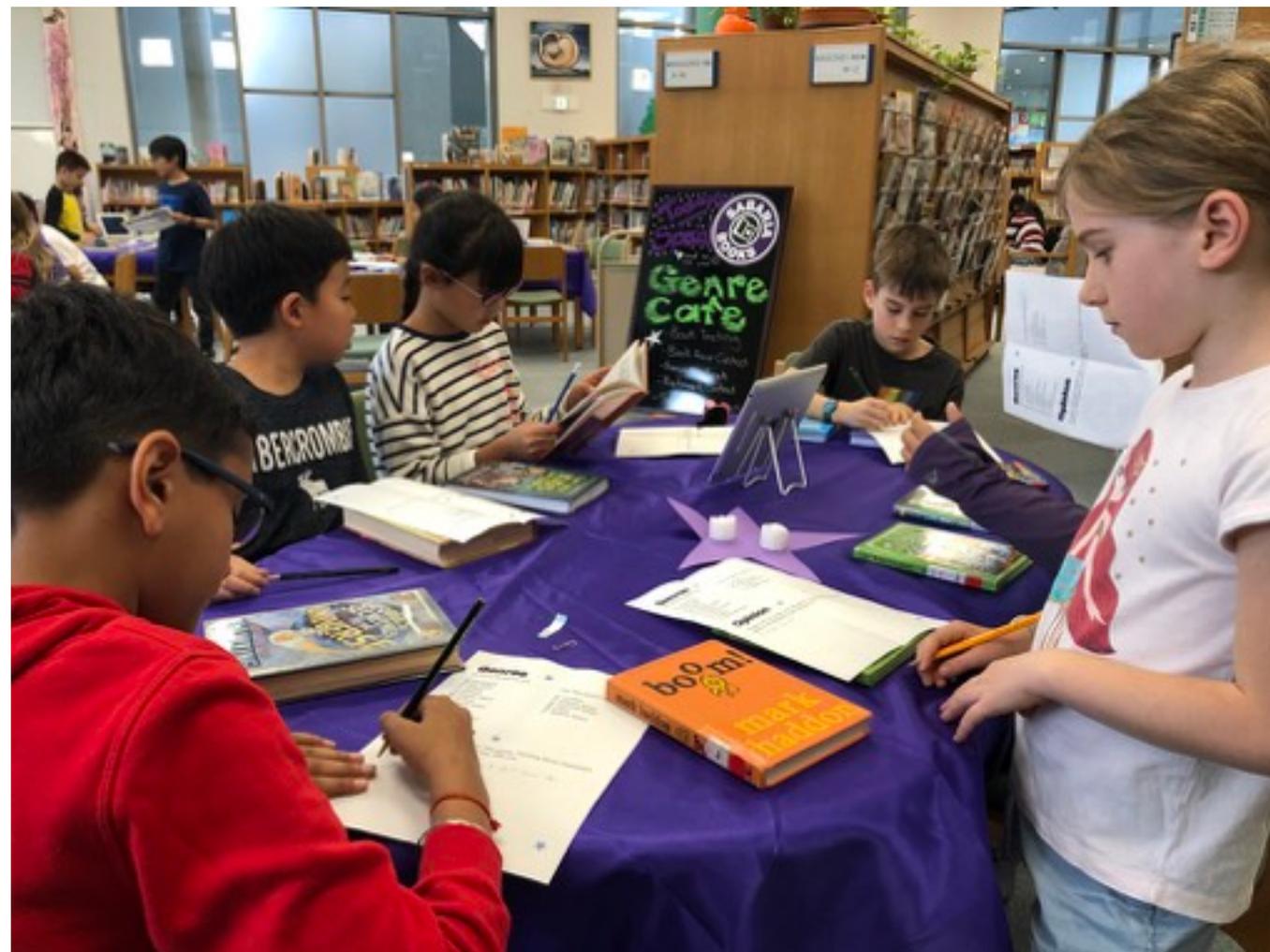
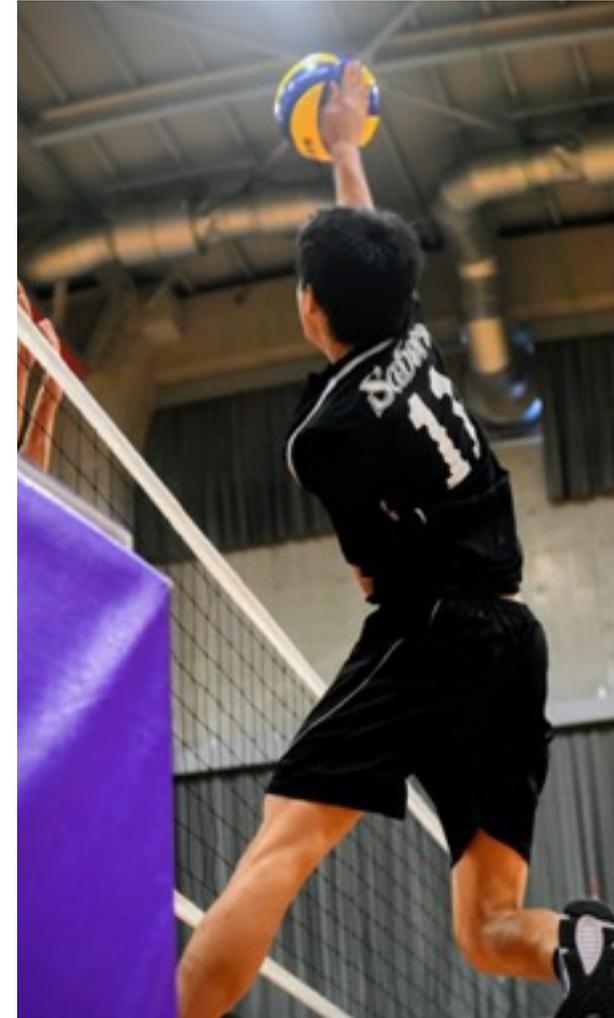
をする農家が多く、カマで刈り取る作業をしてくれる農家がかなり少ないことなど、商品として安定した供給をするにはまだまだ大きな課題があります。そこで総務省地域おこし協力隊が間に入り、猫つぐら用の藁を作ってくれる農家と提携し、一定の質と量が保てるような仕組みを作ったそうです。

## 3. 里山の暮らし

大網集落では、山の湧き水を飲み、手作業で草をとった無農薬の野菜と米、自家製味噌を食しました。自然を破壊しないように、ゴミの分別は厳しく、生ゴミは畑に、プラスチック製品は徹底して分別し、回収されます。村の人口と作業効率から、回収日数は大阪と比べ少ないですが、ゴミが目に入ることはありません。

集落を歩いていると、あちらこちらに手つかずの畑や空き家が目立ち、過疎化を直に感じました。これまで「村のこし」プログラムを支えてくださった方々がなくなったり、都会の子どもものところに行かれたりして、年々、おじさんとおばさんの数が少なくなっています。しかし集落のおじいさん、おばあさんはそれでも元気です。近所のお宅に訪問させていただくと、大阪であればお茶菓子として洋菓子などのお菓子が出されますが、大網では赤飯、煮物、お浸し等のお惣菜、ドーナッツやあげ餅、チョコレートなどたくさんのお菓子が出てきて、盛大にもてなしていただきます。笑いが絶えず、こちらの方が元気をもらえるほどです。

集落には元々から暮らしておられるおじいさんとおばあさん50人と、最近都会から移住してきた家族の子どもたち8人がいます。その子ども達と高齢者の方々との関わりはまるで本当の家族のようでした。どの家の子ともであっても、おじいさん、おばあさんたちは、常に子ども達を見守り、成長を喜び、まるで我が子のように大切にしていました。このように関わり合う姿はもう都会で見ることのできないものです。このような在り方がずっと変わって欲しくないと切実に感じました。



### Super Global Highschool

2015年に文科省より5年間のSGH(スーパーグローバルハイスクール)の指定を受けたわが校。2017年度に行われたSGHの中間評価では、6段階評価の上から2番目、という輝かしい評価を頂いたそうです。でも、SGHっていったい何..?そして肝心のわが子はいつ、何をすればいいの?今回はそんな疑問にお答えすべく、SGH主任の津高絵美先生へのインタビューも交え、SISのSGHに切り口を向けてみました。

※この記事は、2017年度のSISPA PRの取材を元に、追加インタビューを踏まえて加筆したものです。

#### 【まずは基本情報～SGHとは?】

SGHとは、文部科学省が、急速にグローバル化する国際社会で活躍できる人材育成を行う高等学校を5年間指定する制度。SGH指定校のみが参加できる研究発表会などもある。SISはSGHの指定を受け、「高い国際通用性を有するレジリエンスに富むグローバルリーダーの育成」をテーマに掲げ、創立当初から行ってきた多文化教育や探究型学習をベースにしたSGHプログラム、生徒一人一人による「課題研究」をベースとした教育プログラムを展開している。SISでは2020年にSGH期間が満了するが、その後も同様のカリキュラムが継続される。

～SGH指定に際しては、新たな学びを加えた訳ではなく、SISが基盤としてきた国際的な学びや、OISや関学との連携などが評価されたとのことですが、では、生徒たちが取り組む「課題研究」とは? 詳しいお話を、SGH主任の津高絵美先生に取材させて頂きました。津高先生はSISの2003年度卒業生で、スウェーデンの大学院で環境コミュニケーション学を専攻された後、SGH指定に伴い「SGH主任」として着任されました。

#### 【SGH主任 津高絵美先生へのインタビュー】

**Q.**まずはSGHプログラムとして、生徒は具体的には何をすればよいのですか?

**A.**高等部の生徒一人一人が自分の研究課題を決め、リサーチやフィールドスタディ(研修旅行)などを通して問題解決に努め、最後は論文にまとめ上げる「課題研究」に取り組みます。

**Q.**対象者は誰になりますか?

**A.**SIS高等部の生徒全員が対象の必修科目です(但しIBDP履修者や、11年秋学期以降の編入者は除く)。課題研究は主に11

年次に行いますが、その前年の10年次1年間に準備期間に充て、より有意義で深い学びになるよう目指しています。

**Q.**課題研究の流れを教えてください。

**A.**まずは10年次の1年間に『知の探究』(週1時間)で、論文を書くに当たっての様々なスキル～論理的思考力、日本語実践力、統計データ分析方法など～を、国語科や英語科、理科など様々な先生から多角的に学び、学年の最後には、自分の課題研究のテーマやフィールドスタディ先を選びます。

11年次は、いよいよフィールドスタディに出発!フィールドスタディは、夏休みもしくは秋学期にテーマ毎のグループに分かれ、最前線で活躍する3人以上の方にインタビューする研修です。宿泊ありのタイプと、近隣エリア実施の宿泊なしのタイプがあります。取材の次学期には、『リサーチとフィールドスタディ』の授業で最大8000字の論文初稿と、発表用のA0サイズのポスターを作成し、学期末には学内でのポスターセッション(発表)を行います。その次学期には『課題研究論文』の授業を履修し、最終版の論文とポスター、日英二言語の要旨を作成、探究活動を完成させます。

**Q.**課題研究のテーマと、フィールドスタディにはどのようなものがあるのですか?

**A.**主軸となる3つの研究分野「国際貢献」「地球環境」「異文化理解」は、SISが誇る比較文化の授業の流れを受け継いだもの。生徒は、そこから派生する7つのテーマ～2019年度はSDGs1&2、気候変動、ディザスターマネジメント、科学研究、文楽、言語と文化～から一つを研究題材として選びます。各テーマには担当の先生が就き、フィールドスタディ先も国連などの国際機関やWWFといった国際NGO、官庁、企業や大学、その分野の展示会など様々。関学との高大連携やOISとの連携は、大学の講義受講やフィールドスタディ先の拡大など、探究活動を充実させてくれています。

**Q.**フィールドスタディというと、何となく楽しいイメージがありますが?

**A.**楽しくはあるものの、3日間程度で3件以上のインタビューを実施し、宿泊ありの場合は夜に皆で会議室に籠り、振り返り



やディスカッションを行うので、盛りだくさんです。でも第一線で働く方の、経験に基づいた生の声を聴いたり、友人と意見を交えたりすることは、複数の視点から問題を見つめる上でも重要なんです。フィールドスタディを経て視野が広がったり問題の全体像が見えてきたりして、自分の考えや研究テーマを発展させる生徒もいます。

**Q.**学校外の方々とお会いする機会も多いSGH。自由闊達な子ども達は、きちんとお行儀よく接することができるか、ちょっと心配です..。

**A.**なんだか心配な気がしますよね(笑)。なので、10年次の『知の探究』の授業では基本的なインタビュースキルやマナーも学びます。何より事前に調査を重ね、興味と自信を持って向かう取材先。取材の姿勢も自然と良くなり、特に問題なく帰ってくる生徒が多いです。インタビューの際にリーダーシップを発揮する生徒も多いですよ。

**Q.**論文やポスターの締め切り日前には徹夜続きの子続出！など、悲壮？なお話も耳にしますが？

**A.**それぞれの学期の始まりには、必ず各締め切り日を伝えてあるのですけどね..(苦笑：保護者の方も是非お子様とチェックしてみてください！)。授業では、完成までをサポートする仕組みを作っていますし、授業以外でも、担当の教員から個別指導を受けられる「メンター制度」があるので、自分で希望すれば踏み込んだ所まで相談することができます。一つ言えるのは、知識を深めながら悩むことを重ねると、背骨のしっかりした研究になりやすいと思います。漠然と悩むのはダメです(笑)。前向きに悩むのに、友達同士や、お家の方と話題を共有することがいい支えになった生徒も多かったようです。そして苦労の末、完成した成果を友人や後輩に発表するポスターセッションは本当に貴重な機会。個々の学びを学校全体で共有し高め合うこのプロセスは、アカデミックなSOISコミュニティに欠かせません。

**Q.**約2年間かけて、自己の課題とじっくりと向き合うSGHの課題研究ですが、それを晴れて満了した生徒達は、どのような成長を遂げますか？

**A.**生徒により成長は様々ですが、大変なりにプロセスに沿って頑張っていくと、良いものが完成し、自信をつけていくと感じます。自分の興味関心が深まって、自然と進路選びにつながる生徒も多いです。生徒も、(大変だけど)頑張っただけ得るものがあると話しています。何より、研究テーマに基づいて自主的に勉強会に参加したり、一人でインタビューに行ったり、

様々なことに挑戦していく生徒の姿が見られるのは頼もしいですね。

**Q.**SGHで学んでほしいと願うものは何ですか？

**A.**SISのSGH指定時に掲げたテーマにある「レジリエンス」です。レジリエンスとは、心の弾力性と定義されており、困難な状況にあっても柔軟に対応できる力。この力は、この先子ども達がどこに行ったとしても絶対的に必要となる、有益なスキルと感じています。SISは、国連などで声高に意見する子だけを育てたいのではありません。日本企業や発展途上国、それから地域で働く子もいるでしょう。それぞれの将来の場所は背景も問題の規模も様々で多様だと思いますが、SISで育んだ地球市民の精神とレジリエンスを活かし、個々の場所で、今の取り組みや問題を一步でも前に進め、グローバルイシュー解決に向かって前進してほしい。そしてその力を今、教師からだけでなく、生徒同士から、そして外に出て生の声に触れ、社会から学んでほしい。そんな思いで教師一同取り組んでいます。

～津高先生、貴重なお時間をありがとうございました！教科書やネットの情報を超えて、教室を超えて、リアルな世界に肌で触れるSGH。友達や先生、学校外の方々と議論をぶつけ、自分の頭を目いっぱい使って探究を深めるSISでの学びは、生徒一人一人に柔軟でタフな力をつけることができそうですね。

最近ではSGHを利用した入試枠を提示する大学もありますし、推薦入試の活動履歴にSGHの成果を盛り込むことも可能なようです。(KGのSGH入試も、引き続きSGH実績校として対象になる模様。)文科省のSGH指定期間が終わっても、引き続きこの質の高い取り組みを継続していただけるのは嬉しい限りです。今後はより教員間の連動も図り、SISの状況に応じたカリキュラムとなるだろうとのことでした。保護者としても、子どもが関心を寄せているテーマと一緒に語らうなどの温かいサポートができるといいですね。秋、冬、春の各学期末にエントランスで行われるポスタープレゼンには、ぜひ保護者の方々もたくさん観に来ていただきたいと思います。津高先生、これからもよろしく願いいたします。

★SGH活動詳細はブログ (<http://sisgh-ja.blogspot.com/>) をご覧ください

文責：SISPA PR委員会 江上晶



# | Sabers Sports

## HS boys Volleyball

バレーボールのシーズンを通して、改めてチームスポーツの良さを感じた。プレイヤーが一つのチームとして、お互いが練習の時に切磋琢磨しあえるようにそれぞれにアドバイスし、より楽しく、実戦で有効的な練習をすることができた。試合で勝った時も負けた時も試合内容を反省し、それを修正することが良い経験だった。SIS 12年 横山 寧央

「確率を考える」、「チームでの役割を考える」これは、三ツ橋先生が練習中に何度もチームに呼び掛けた言葉だ。私は、それまで何事もがむしゃらにすれば良いと思っていたがこの二つの言葉に今までの自分を考えさせられた。そして、この考え方をすることでバレーボールだけでなく人間的に成長できたと実感している。SIS 12年 林 昇



## HS girls Volleyball

押しつぶされるような暑さをかき分けて入っていったあの感覚をこれほどまでにあっという間に忘れるものなのだろうか。エアコンは偉大だ。2019年夏、SOISの体育館に冷房が入った。窓を開けないので隣の竹やぶからやってくるやぶ蚊の集団にボコボコにされることもなくなった。初めての快適なバレーボールシーズン。

ホームでのAISA、ディフェンディングチャンピオンと、期待とプレッシャーのかかるシーズン、5人のシニアたちがチームをそれぞれの思いを最後のシーズンにぶつけた。AISAでの優勝を目指す者、バーシティーチームに入ることを目指す者、スターティングメンバーになることを目指す者、自分のプレイが、チームのプレイが思ったようにならず悔しい思いをしたり、腹立たしい思いをしたり、怪我をして痛い思いをしたり、思ったようにプレイできず、思ったような結果を得られず、もがいていた。

どうにか少し自分たちのプレイに、やってきたことに、少し自信がわいてきて、ようやく迎えたホームでのAISA。楽勝に思えた試合に負けそうになり、慌てて、焦って、いつもどのようにプレイしていたのかがわからなくなり、苦しみながらどうにか勝利した1試合目。少し落ち着いてプレイできた2試合目。明日の準決勝に向けて気持ちと体調を整える。

そして、しかし、明日の準決勝は来なかった。

台風19号は記録的な豪雨をもたらし日本列島に大きな被害をもたらした。SOISではフィールドの大木が強風により根元から折れた。学校に宿泊していた横浜インターナショナルスクールの生徒やコーチ、各家庭にホームステイしていた韓国チームの選手たち、ホストファミリー、ホテルで心細かったらうコーチたち、言葉のわからない異国での大きな災害に遭遇しどんな気持ちだったのだろうか。さぞ不安だったことだらう。自分が外国で同じような境遇に置かれたらどのように対処したのだろうか。

色々な可能性を探ったものの、やはり安全・安心には代えられず、決勝トーナメントは中止となった。プツリと断ち切られたシニアたちの思いを慮るとやるせない。

しかし、だからこそ、日曜日朝、無事にそれぞれのホームに帰る選手・コーチを無事に送り出せたこと誇りに思う。すべてをコートで出し切ることができなかったけれど、最高のホスピタリティを示すことができたと自負する。たいへんな状況において無事にゲストの選手たちを守ってくださったホストファミリーこそが、今大会のMVPなのだと思う。そんなコミュニティに支えられてプレイできることを幸せに思う。ありがとうございました。(コーチ 平井 太佳子)

## HS/MS Cross Country

生徒たちは、日々の厳しい練習にも前向きに取り組んでくれて、ランニングの力や団結力を高めてくれたと思います。シーズン中は、CAで行われたWJAAトーナメントやプサンで行われたAISA(HSのみ)に出場し、個人やチームの力を存分に発揮することができました。また、枚方市で行われたフルマラソンリレーに2チームが参加し、チームで協力して楽しく走ることができ、良い思い出となりました。

来シーズンは、個人の更なるレベルアップ、そして、HSはAISAでの総合3位以内を目標にし、今シーズンよりも、更に楽しく元気に頑張ってもらいたいと思います。



## MS girls Softball

みんなで仲良く楽しく練習しました。ベースランニングなどのしんどい練習もチームで力を合わせて頑張りました。トーナメントでは優勝はできませんでしたがAチーム、Bチーム共に強いチームにも張り合えるようになりました。

SIS 9-3 林 凜



# MS boys Baseball

Aチーム、Bチームともに優勝しました！

それではここで、Aチームの決勝戦のダイジェストをお送りします。

	1	2	3	4	5	6	7	計
CA	0	0	0	2	0	0	1	3
SOIS	0	0	1	0	0	7	×	8

事実上の決勝戦となったCA戦の先発はRyo。時間関係なく7イニングやることを試合開始前に決め試合がスタート。

初回は2アウトを取るものの連続フォアボールで1、2塁のピンチを迎えるも相手の5番バッターを空振り三振にとり初回のピンチをしのぐ。その裏、先頭のRyoがセンターへの2ベースを打ちチャンスを作るも得点ならず。迎えた3回裏、先頭のRyoのフォアボールを足掛かりに3番Daikiがヒットでチャンスを広げ4番Manatoのタイムリー（打った本人が昨年に続きちょっとビックリした表情）で先制点を奪う。しかし、その後の1アウト2、3塁のチャンスでは後続が倒れ1点のみに終わる。次のCAの攻撃の4回表、ノーアウトから2本の長打を浴び、たちまち同点に、更に相手の4番がセカンドフライを打ち上げるものの、台風直前の影響もありセカンドが落球、逆転をゆるす。その後のバッターは打ち取り何とか2点で抑える。

円陣を組み迎えた6回裏、先頭7番Keigoがピッチャーゴロを相手のエラーにより出塁、続くSoraがフォアボールを選びノーアウト1、2塁。9番Ryotoがファーストゴロの内野安打で満塁の大チャンス。1番Ryoが押し出しのフォアボールを選び同点、2番Sotaも押し出しフォアボールで3点目を奪い逆転、3番Daikiのセンター前ヒットで4点目、そして4番Manatoがレフトへの満塁ホームランで合計7点を取るビッグイニングとなった。7回表CAの最終回の攻撃は先頭打者にホームランを打たれ不穏な空気に。選手全員が前日のMarist戦のことを思い出し浮足立つ。次のバッターを三振に切ってとりワンアウトは取るものの、次のバッターにはセンター前ヒット、サードのエラー、デッドボールでワンアウト満塁の大ピンチを招く。しかし、最後は2番バッターを空振り三振、相手の3番バッターをセカンドゴロに打ち取り見事に勝利を収めた。Ryoは109球の完投勝利でした。（コーチ 山田 優介）



# Interculture content

submitted by Peter Heimer, SOIS activities director, Nov 11, 2019

SABERS ONLINE

Sabers website: <http://sabers.senri.ed.jp>

Sabers Athletics Facebook page: <https://www.facebook.com/groups/SabersAthletics/>

## AISA VOLLEYBALL, CROSS COUNTRY RESULTS

11-12 October 2019

VOLLEYBALL girls @SOIS 大阪 2nd

all-tournament team: Leona Yanagi, Mae Sakita, Ayumi Oka  
coaches: Takako Hirai, Kenzo Yoneda  
managers: Rena Kishigami, Kano Makimura, Aya Fukuda, Sumire Okawa, Yui Arai

VOLLEYBALL boys @KIS ソウル 5th

all-tournament team: Rizumu Kishi  
coaches: Toshifumi Mitsuhashi, Keiji Majima  
managers: Sato Kamimura, Sophia Smith, Aoi Okita, Hinako Kudo, Janet Jones

CROSS COUNTRY@ISB 釜山 4th

all-meet runners, girls: Ami Kasumoto, Lisa Ue  
all-meet runners, boys: Riki Sampson, Haruto Fukuma  
coaches: Hisashi Munemasa, Tara Cheney

## AISA EVENTS 2020

<http://sabers.senri.ed.jp/aisa-calendars.html>

2020年01月17日-18日

女子バスケットボール@SIS ソウル

男子バスケットボール@SOIS 大阪

数学/リーダーシップ @ISB 釜山

2020年04月17日-18日

女子サッカー@YIS 横浜

男子サッカー@KIS ソウル

バドミントン@KISJ 済州 Jeju

## Sabers leagues: WJAA and AISA

The Sabers of Senri and Osaka International Schools of Kwansai Gakuin (SOIS) belong to two competitive sports leagues, one domestic and one international, each with season-ending championship tournaments. Participation in these leagues gives SOIS students ample opportunities to interact with students from many countries.

SOIS is a founding member of the domestic Western Japan Athletic Association (WJAA). The Sabers compete against WJAA members and host important WJAA tournaments. There are weekly WJAA competitions and season-ending tournaments at all levels: high school varsity and junior varsity, and middle school A and B divisions. The WJAA consists of several international schools and US military base schools in Japan, predominantly in the Osaka-Kobe-Kyoto area, but also stretching from Sasebo to Fukuoka to Nagoya to Yokohama to Hokkaido.

Canadian Academy (Kobe)  
EJ King High School (Sasebo)  
Fukuoka International School  
Hiroshima International School  
Hokkaido International School  
Kyoto International University Academy  
Kansai Christian School (Nara)  
Marist Brothers International School (Kobe)

MC Perry High School (Iwakuni)

Nagoya International School

Senri & Osaka International Schools of Kwansai Gakuin

Sons of the Light International Christian School (Hyogo)

St. Maur International School (Yokohama)

Yokohama International School

SOIS is also a founding member of the Association of International Schools in Asia (AISA) and competes in volleyball, cross country, basketball, soccer, badminton, math mania and leadership. AISA is the main avenue for overseas competition for SOIS students and provides opportunities for valuable international experiences for our school community. AISA consists of six schools in Japan and South Korea.

International School of Busan

Korea International School

Korea International School Jeju

Senri and Osaka International Schools of Kwansai Gakuin

Seoul International School

Yokohama International School

## SABERS WEBSITE

セイバーズ スポーツに参加したい生徒は、必要な手続きをセイバーズのホームページ (<http://sabers.senri.ed.jp>) 上にて完了してください。

毎週土曜日に本校や近隣のインターナショナルスクールにおいて、スポーツの試合が行われています。セイバーズのホームページ (<http://sabers.senri.ed.jp>) では、学校が発行するカレンダーに記載されているスポーツの各大会 (WJAAやAISA、セイバーズ招待試合) の日程に加えて、週末に行われる試合のスケジュール (開催場所や開始時間) やその結果を確認いただけます。また試合でハツラツとプレーしている選手の写真などもご覧いただけます。それ以外にも、セイバーズ・アクティビティー・ハンドブックやホームステイに関するご案内、セイバーズ スポーツに参加するために必要な保護者承諾書などの提出書類一式などが、ホームページからご覧いただけます。この機会に一度、ホームページにアクセスしてください。

Be sure to bookmark the Sabers athletics website at <http://sabers.senri.ed.jp>. For all Sabers information – weekend schedules, tournament reports, team photos, permission forms, homestay information – please visit the Sabers website. You can read the Sabers activities handbook, submit a digital copy of your passport, and view a Sabers Google calendar.

# | 学年だより Grade Reports

## ◆Grade 7

森岡 啓 (理科)

今年度の7年生は、キャリア教育の一環として、11月11日に進路講演会を企画しました。今回は映画やドラマの世界で「監督業」をされている内片さんをゲストティーチャーとして招き、実際にはたらくことの意味や価値についてのお話を聴きました。仕事を通じて、「人を楽しませること」「人に良い影響を与えること」の喜びを生徒は学ぶことができました。どの生徒も講演会後のリフレクションシートにたくさんの文字を記し、生徒の心に響く講演会となりました。以下、一部となりますが、生徒の感想を紹介します。

- 「人を楽しませる」という目標をもって、やりがいがあるのは素晴らしいことだと思いました。
- 影響力のある講演で、非常に心に響くものでした。ありがとうございました。
- たくさんの方に対して、たくさんリスペクトしていてかっこいいなと思いました。
- とても面白い講演でした。今まで知らなかった新たな知識を得ることができたので、とてもうれしかったです。これからも面白い映像を撮影してください。

## ◆Grade 8

彦坂 のぼる (英語科)

秋学期前半のLHRはスポーツデイの準備を行っています。6年・7年・8年が4つのハウスに分かれるため、SISでのスポーツデイ経験2年目にして早くも最高学年です。今年度は、今までPEの授業でしていた競技のサインアップを初回ミーティングで行いました。ハウスの人数はそれぞれ55名～56名ですが、それに対して生徒会メンバーは2～3名ずつ。普段のクラスの倍以上の人数をこんな少人数で仕切るには、生徒会メンバーを支える力が欠かせませんが、8年生が協力的な姿勢で模範となり、スムーズに終わることができました。その後、ポスター係、チャント係（応援を考案、リードする）、パフォーマンスの係決めも時間内に済ませ、現在は各係毎に準備を進めています。8年生はどのハウスでも、時にリーダーの支えになり、時

に自らリーダーの役割を果たして活躍しています。今年度は7年生の生徒会メンバーもいますが、年下のリーダーを尊重する姿勢はSOISならではです。なかなか進まないこともあるようですが、当初例年よりLHRの回数がかかなり少なく心配していたのが嘘のように、むしろ限りある時間を最大限に利用し、効率的に練習と準備をしています。成長への自信を自らの力でつけていくプロセスを見るのは、ちょっぴり寂しく、とても嬉しいことです。スポーツデイはたくさん楽しんで、良い思い出を作ってほしいと思います。

## ◆Grade 9

Field Study Trip in Aichi (9年生の挑戦)

長谷川 妙子 (英語科)

入学以来、毎年ホームルーム活動においてプロジェクトに取り組んで来ました。即ち、7年生の時には「スクールミッションに基づいた、School of Hopeへの募金活動」、8年生の時には「5リスペクト」の授業と連携して「インクルーシブな社会を考える」というプロジェクトを行いました。

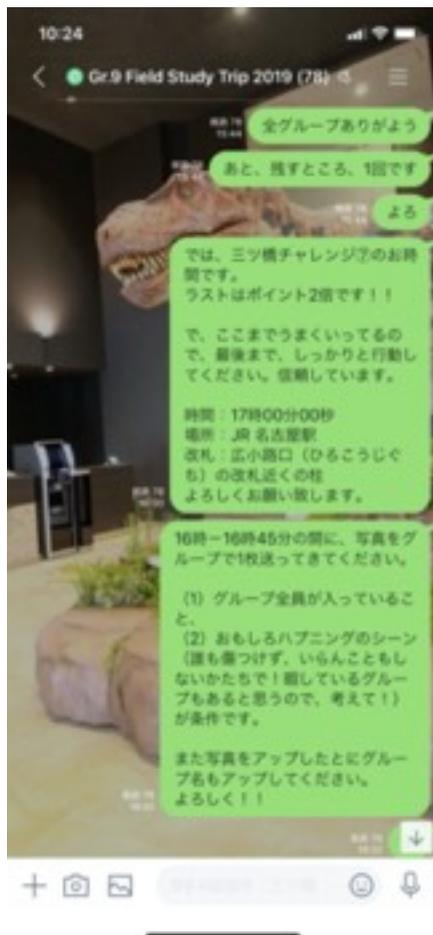
8年生冬学期から「入学以来、自分で課題を見つけ、自分で解決方法を考えるという責任と自由を楽しんできました。これからは自ら課題を発見し、答えが一つに定まらない問題に解を見出していくために必要な能力を身につけていくことが大切です。」という考えに基づき、9年生の学年旅行を「1日目には、自分たちのリサーチ・クエスチョンに基づいて、考えて、調べて、判断していく」というField Study Tripとし、「2日目は、学年全員で思いっきり遊ぶ」というものにしました。

Field Study Tripを実りあるものにするため、8年生の時に目的地の設定を生徒自身が行いました。目的地は「愛知県」で、「変なホテル」での宿泊を希望する、ということも決めました。9年生になってからは自分達の興味ある分野毎のグループで、リサーチ・クエスチョンを作り、目的地での探求の準備を行いました。興味ある分野が多岐にわたっていたため、探求の場所も水族館であったり、人気企業であったり、と多岐にわたりました。いずれのグループも着眼点が面白く、また実際のフィールドスタディでは予想外の問題にも遭遇しましたが、そのような問題が起こっても自分達で解決していきました。9年

生の挑戦として素晴らしい結果を残したと評価しています。

このプロジェクトを安全で実りあるものにするためにも、またラインの賢い使い方を学ぶためにも、ラインに参加している

生徒全員と引率教員全員がFSTグループを形成し、そのグループを活用しました。1日目にグループ毎に近鉄を使っでの移動時には、安全確認が欠かせなかったため、この方法は極めて役に立ちました。具体的には、「三ツ橋チャレンジ」と称して、4組担任の三ツ橋が指示を6回送りました。例えば、2回目の「チャレンジ」は「グループ全員が写っている、そして変顔をしている写真を送れ」というもので、生徒達は嬉々として対応してくれました。右の写真



は、最後の「三ツ橋チャレンジ」を示しております。この「チャレンジ」にも全グループがきちんと対応し、全員が時間を守り、自分達の探求を見事に達成いたしました。下記のQRコードは、安全確認のために撮影した写真を使用し作成した1日目の様子の動画です。ご覧頂ければと思います。

2日目の「学年全員で思っきり遊ぶ」という目的も達成しました。「絶対にひとりぼっちを出さない」ということを旅行前から旅行委員も言い合い、他人へのリスペクトを含め、5リスペクトを考えた行動を全員がとった



ことを嬉しく、そして誇らしく思っています。教員にとってのサプライズは、旅行を終え、帰宅したあたりから「楽しい旅行でした」「もう一回行きたいくらいです」「有り難うございました」というメールが、FSTライングループに次々と送られてきたことです。旅行後のLHRにおいてとった、振り返りアンケートからも、全員が今回のFSTを通して成長したこと、FSTが極めて実り多いものであったことが分かります。この実りを、

スライドにして、プレゼンテーションデイに8年生を対象に発表いたします。

## ◆Grade 10

水口 香 (英語科)

### 【スポーツデイ】

10月15日(火)、1日遅れでスポーツデイが開催されました。今年のスポーツデイのテーマは「日本」、学年カラーは青色。古典柄のTシャツを身にまとい、応援グッズの軍配団扇を手にも、皆で応援しました。くま手の応援団も可愛かったです。またOISとSISが連携し、華やかなパフォーマンスを作り上げ、本番は2位になりました。今年は、競技に新しく新型の玉入れが加わり、より多くの生徒と一緒に参加できるようになりました。この他、ポスター制作が競技時間に並行して行われるようになり、工夫を凝らしたポスターができ上がりました。ドッジボール、フリスビーも上級生にもまねながらも果敢に戦う姿はすばらしかったです。

### 【大学見学会】

スポーツデイの翌日、関西学院大学理工学部及び総合政策学部の授業を体験しに行きました。1つ共通の講座「大学での学びとは」と自由に選べる授業を受講しました。大学の先生方は高校生でもわかるように工夫して話してくださったり、大学生と同じように機材を使わせていただけるように準備してくださっていました。またSISの卒業生が挨拶に訪れ、専攻している研究やクラブ活動についてなど、生徒が知りたいと思っていることを直接、話してくれました。それぞれ感じたことは違うと思いますが、それこそがこのプログラムの目的であり、大切な収穫でもあります。大学の授業見学から得たことが、SISでの学びに活かされるよう願っています。

### 受講した講義

理工学部「AIもCGも鍵となるのは最適化だった!」、「ゲノム情報医科学 藤研究室見学・模擬授業」、「多項式マリオで関数洞窟を走破せよ!」

総合政策学部「国際協力論」、「自然保護政策論」、「英米文学B(ビクトリア時代)」、「戦略的思考と合意形成」、「情報メディアとエディターシップ」

### 【LHR活動】

11月4日のLHRでは、「リーダーシップを大切に」について、いよいよ校内でリーダーの仕事を担当していく10年生に向けて、高等部生徒会執行部会長と副会長から、リーダーシップについてお話いただきました。生徒会役員に立候補しようとしたきっかけ、スクールコミュニティに貢献する意義、周りの人の助け、リーダーとしての大変さと喜びなど、心に響くお話を

たくさん聞くことができました。10年生は来年、生徒会、キャプリーダー、クラブ部長、学年旅行準備委員、オールスクールプロダクション、コンテストなど、SOISコミュニティの中で集団のまとめ役として一役を担う機会が増えます。10年生のこれからの活躍も楽しみにしています。



高等部生徒会会長・副会長による「リーダーシップ」についての講演

## ◆Grade 11

平井 太佳子（保健体育科）

いつまでも暑いと思っていたら急に冬になりました。いったい気持ちの良い秋はどこに行ってしまったのでしょうか。今日も先ほどほんのわずかな時間でしたがドシャ降りになりました。今は日が差しています。なんとも激しい気象の変化に「やはり地球温暖化か」などと、知ったかぶったりする一方、台風、水害など自分の身を自分でしっかり守るための備えを怠ってはいけない、と痛感します。

防災について昨今「自助・共助」が求められています。「公助は？行政は何もしてくれないのか？」という問いの答えは「そうです、そんなにたくさん、きめ細かくはできません。限界があります」というものです。

自分の命を誰かに託すわけにはいかない、少なくとも私たちは交通量の多い道を渡るとき、車の列が途絶えてからしかわたることはしません。横断歩道のない道では歩行者が道を渡ろうとした場合、車が停止することが義務付けられています。しかし、私たちは、時速40キロで走る車の前に歩み出て、運転者のモラルを確かめるような賭けには出ないのです。だとすれば、やはり災害から身を守るための知識を持ち、その技を身につけることは、交通量の多い道路を歩く時の歩き方を幼い時に身につけるように、災害の多いこの国で生きていくための「生きるための知恵」なのだと思います。

自分自身の身の安全を守るように、自分自身の身の振り方を決める時期が迫ってきています。11年生のみなさん、誰のものでもない自分の人生を自分らしく生き生きと生きていくために周到に準備してください。3年後の自分はどこでどんなことをしたいのでしょうか、10年後の自分はどこでどんな風

に生きていたいのでしょうか。あなたにとって譲れない「大切なもの」「大切なこと」は何ですか。自分自身に問いかけてください。そして、誰かに決めてもらうのではなく、自分で情報を集めて、自分で考えて、自分で決断して、行動してください。

論理的に考えるとともに、自分の「感」も大切にしてください。「ピンッ」ときたそれは、あなたの人生に理屈抜きに大切なものなのかもしれません。

人生の先輩たちはいくらでも相談にのりますよ。でも、決めて選んで歩むのはあなたです。

## ◆Grade 12

松島 勇（国語科）

高3の夏、受験生としての夏を乗り越えて、秋学期を迎えた12年生は、最後のスポーツデイも無事に勝利を収め、SOISの仕上げの時を迎えようとしています。個々にはまだまだ受験を控えて学習に励んだり、次の目標に向かって準備をしたりと校内、校外でも力を尽くしています。4月には最後の一年を充実させてほしいと言いましたが、それも後1学期を残すのみとなりました。最後の時間割も受け取りましたし、卒業式委員会も活動を始めました。ですが、最後の学期だからと何か特別なことをして印象に残そうなどは考えないでほしいと思います。スポーツデイで見せたシニアの力を学校生活の様々な場面で発揮して、シニアらしい態度、考えを持ったよき先輩の姿を、後に続くSOIS生に見せてほしいと思います。

さあ、有終の美を飾るべく頑張ってくれることを期待しています。

# | Book Week

## SOISにおけるブックウィーク



先日、創立後初のSOIS 共催ブックウィークが行われました。

SOIS図書館も来年で30周年を迎えるという今年、初めてブックウィークという大々的なイベントを共催という形で執り行うことができました。ほんの数か月前に着任したOIS司書教諭メリッサの情熱とその情熱に感化されたSIS司書教諭が仕掛けた数々のイベントひとつひとつは、読書がSOISファミリーの人生の糧になるようにとの願いを込めて皆さんに届けられたものでした。

📖Book Sale：SOIS PTAの方々がイニシアティブをとって、図書館へのファンドレイジングをしてくださいました。素敵な本を多数おさめて下さった八木書店、笹部書店様、ありがとうございました。

📺OIS5年生によるビデオ：中学生になっても読書家のお手本になりそうな5年生たちの各ジャンルについてのスキットがそれぞれユーモアに富んでいましたね。

📖きたむらさとし先生によるオーサービジット：国語授業（SIS7年生）でいただいたお話では、人生で大切なことは何かを教えてくださいましたのではないのでしょうか。OIS小学生さん達は、きたむら先生の紙芝居とヘアスタイル作りに夢中でしたね！

📖保護者向けイベント：SOIS両司書教諭が思いやりを育む読書について話させていただきました。その後直観読みブックマーカーでは、本の神様から「愛」のこたえを貰いましたね。

📖ミステリーリーダー：誰が来るかな？わくわくドキドキの読み聞かせの時間でしたね！

📖ブックスワップ：OIS12年生水野愛美さんによるブックスワップ。どんな新しい本に出会えたかな？

📖キャンプRead a Lot：学校内でキャンプをしながら読書？テントの中で読む本は違った意味で不思議感いっぱいでしたね。

📖杉山亮先生によるオーサービジット：なぞなぞ、しりとり、言葉遊び、杉山先生の口からあふれる世界に想像力がかきたてられましたね。

📖科学道100：「未知に挑戦し続ける科学者たちのアタマとココロを覗いてみたら生きるヒントに溢れていた。」理化学研究所と編集工学研究所が選んだ100冊、11月中旬まで展示しています。

📖Book Character Day：OISでは恒例の大トリ。たくさんのキャラクターが登場しましたね。ミルキー杉山が生みの親「杉山先生」に会ってびっくり！という微笑ましい場面も？！

初めてのSOIS共催ブックウィーク、どうでしたか？このニュースレターを読むまで「知らなかった」方も多いかもしれません。ブックウィークで本の楽しさを知ったひと、生まれながらにして読書人なツワモノも、読書嫌いの人も、ぜひ図書館や本屋へ足を伸ばしてみてください。きっと何かが見つかるはずです。私たち司書は、世界中のひとたちが心を震わせるような本と出合って欲しい

と毎日願っています。SOIS図書館の飛躍をこれからも応援してくださいね。



# 編集後記

## | Editorial note

インターカルチャを再び発刊するお手伝いが出来たこと、保護者会としても大変嬉しく思います。

この半年程のPR委員会の活動を通じて思うのは、SISは保護者にとっても素晴らしい出会い、学び、感動の場であるということです。私達、PR委員会は一人でも多くの保護者の方に、SISの事をお伝え出来る様に行事の取材・HPの運営をしていますので、インターカルチャが復刊することにより、SISの事をより身近に感じて頂ければと思います。インターカルチャについて、ご要望・ご意見などがございましたら、PR委員会 ([sispa-pr@soismail.jp](mailto:sispa-pr@soismail.jp)) まで是非ご連絡下さいませ。

(PR委員長 高城 啓子)

約1年ぶりにINTERCULTUREが復活しました！

記事・写真を寄稿してくれた先生、生徒のみなさんのご協力に感謝します。おかげさまでこんなに賑やかなINTERCULTUREが完成しました。楽しんで読んでもらえたら嬉しいです。ぜひ感想も聞かせてください。次号への制作意欲が向上しますので！

ところで、肌寒い季節となってきたことで、冬の訪れを随所に感じるようになりましたね。兵庫県新温泉町にある小中学校の給食ではセコガニ（ズワイガニのメス）が振る舞われたり、11月1日からは福島県北塩原村にある桧原湖と小野川湖でワカサギ釣りが解禁され、コンビニではクリスマスケーキやチキンの予約が始まり...ごっくん。

INTERCULTURE Student Reporterも募集しています！詳しくは牡蠣...おっと下記をご覧ください。

(SIS数学科 小川 達也)

# INTERCULTURE

Student Reporter 大募集！

INTERCULTURE復活に合わせて、Student Reporterも復活します！

INTERCULTUREのために、取材や記事作成、写真撮影をしたい！という熱意溢れる人材を募集します。

希望者はSIS数学科小川のところまで来てください。